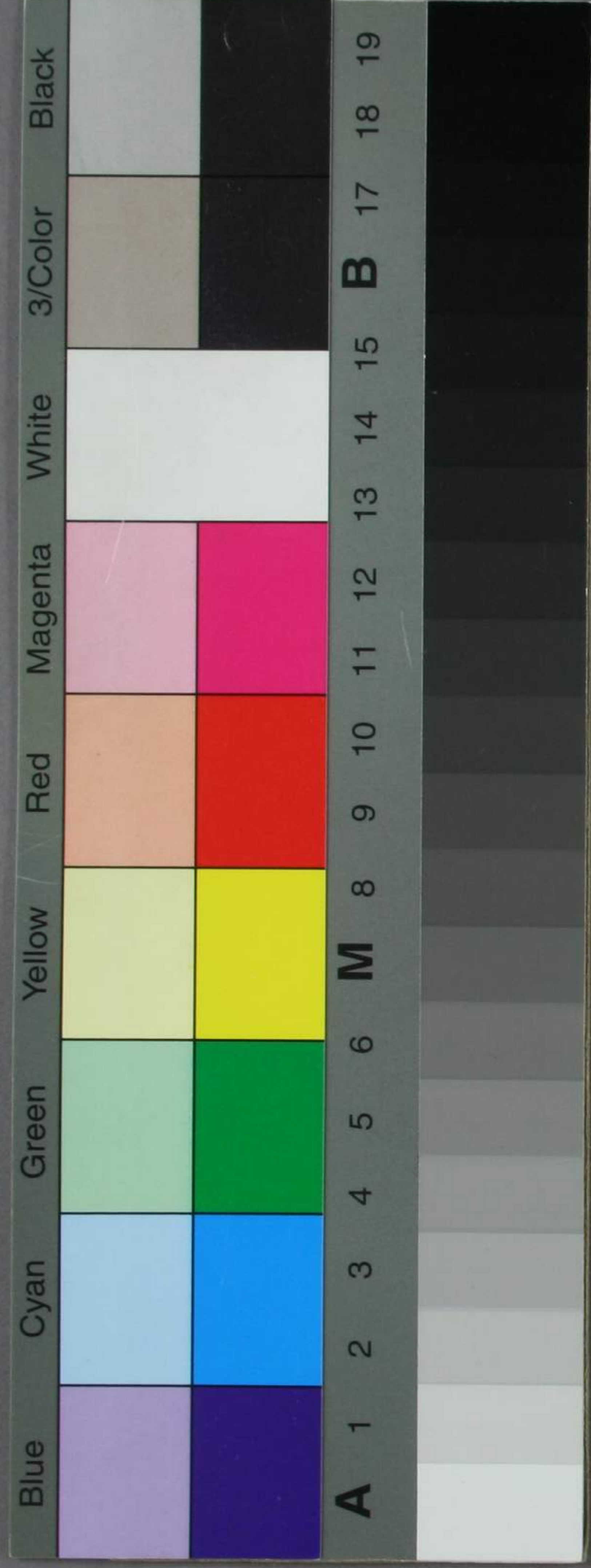




阿玉

2912

阿玉が池後編叙

補えが梅玄妙也といえども其香を画り
能くも玉磨結が雪中の芭蕉人目を
驚くもといえども其寒を著ふ眼を
能くもさるる中舟の鏡も
著る戯作者の人情を實といえども

本
大
商

昭和九年七月六日

丹青の梅の夢雪の寒ふ平雪
覽君の嘆をひるものいふなり
雪ふ入聲ありて容のまじり也
風を画んとするふ象ありて
野辺伏枕を画ごとく雪著の情
あはれ身のかゝる傷象の大極
佛象の

其如戲作家の的指希ふ
僥倖ありて神田新橋の後編を
雪ふはるる象のものありし

丙申孟春鼻山人誌

麟鳳々何々
御代の春

八

三



高

子

ちよの

Thurs

孝

あひ

善柳の系

書人





神田屋 阿玉が池後編上巻

鼻山人著

○第四譚

あんなにうまいもの
 鰻が能く言ふとも飛を離れず程々能く言ふとも食難
 城離れず今人れいふは能く言ふのとていふ食難の心を
 ますとこれ記おえさう儲の角田さうお玉がふ笑
 の言を覚えておのれさう胸中をいさむるれうと且
 且思れて良き何の返答もあつて
 すがたふらふとあるの

可憐のふいふいふさきものなるを苦勞あ
 却て病にちかひていふ日もあらず全はす
 いふ事科のふいふさきものなるを苦勞あ
 かへりさきものなるを苦勞あ
 方また泣の涙のなぬとぬたふかきものなるを苦勞あ
 妹のふいふさきものなるを苦勞あ
 目のかきものなるを苦勞あ
 杯とてさきものなるを苦勞あ

あふりさきものなるを苦勞あ
 泣かぬさきものなるを苦勞あ
 いふさきものなるを苦勞あ
 可憐のふいふいふさきものなるを苦勞あ
 女でさきものなるを苦勞あ
 るさきものなるを苦勞あ
 通のふいふいふさきものなるを苦勞あ
 可憐のふいふいふさきものなるを苦勞あ

卷三

ようふ代まへにぬをあくまで、
 歌流カノあたまがゆのうら
 ゆもそ人の新いづれをもとむると
 母のけがめの人の中ふありせ
 ればふ代きものうちおさそ六
 吾娘あらうと母のうら下ろ
 あふげせ落すうらうらふおめ
 か置はくそんのはつと母の
 お二もやうしづまる縁でな
 ちかお上り大旦那さまちどめ
 おまじなまふか悪おうく
 雪のひか悔をいつたれまするを
 仇めちうふぞんどませねえ来
 あし大初めの時をもられて
 うー^{ひか}
 雪をとんでもあしをうても
 優りのまゝ母のおしき妹の中
 であ

思ひて病と知りあつてゐます。す。あり。難ひか。と。を。と。れ。お。は。け。
 ても。あ。い。ま。も。く。平。愈。あ。り。た。げ。す。中。う。お。出。ま。る。ん。の。こ。ち。で。
 り。お。つ。て。病。う。ま。り。こ。ん。の。ま。で。こ。ん。か。と。い。う。か。ん。ぐ。ん。あ。く。こ。う。く。あ。や。ぶ。う。く。
 か。う。お。あ。病。人。の。ま。で。と。ん。る。あ。の。こ。の。速。速。あ。ま。り。ん。ア。
 せ。で。お。ひ。と。れ。よ。う。や。あ。つ。さ。う。と。い。う。こ。と。あ。い。ふ。ま。う。ぐ。う。い。は。
 ら。れ。い。お。ん。た。り。せ。う。う。ひ。る。を。や。ま。し。て。お。あ。い。ぬ。こ。と。い。ふ。
 思。は。が。し。と。い。う。も。せ。あ。い。し。な。い。ヨ。う。で。お。い。ぬ。る。是。の。こ。と。
 とい。ふ。も。の。を。い。ふ。は。あ。い。ふ。が。ん。あ。い。の。こ。の。も。う。一。番。お。い。ぬ。る。

どのかゝが死し骸が不ふとうすう推おたりて母ははお玉たまやううか玉たまくくトト母はは
 母ははと叫こゑべとト云いの言ことも今いまあゝ細こ虫むし知しがされままつるつると云い
 コレこれお玉たまは死しねるねるあ合あひはあもあゝれと父ちちさぬやばらら一ひと人ひと
 強つよひるひる影かげとてあゝ死しなふとてちひさふ時ときら考かうひるひる日のひの
 吾われ儼げんが持も病びやうの毒どくをあドどとがーがーばらるばらる看かん病びやうをさささと
 人ひとようあゝ考かうがささ死しねるねるを知しるるべべとコレこれ母ははさぬさぬちち中ちゆうと
 りさうりさうませませ替かへへががちちちち死しなふとと知しるる一ひと人ひとのの細こさ父ちち

さぬハ男のふつひさるるもまゝあがり母さぬ人か使るれはまゝ
 あぬてふされとちひさふちうらまき芳あゝそのん根がいつい
 かゝもちかくぬ人させ養育とつて代をゆづる所てうら初孫
 の親又てききふぶふうもあら樂しきと教へんとも養育の中ま
 りふのやゝとコレおむきき下云母さぬと喉乞して死んでくま
 四十九日がそのちひ家の持するれぬ魂魄と娘お松の魂の成
 そあゝもようおきいて居るがら母おむりうりの云せぬお教へんせ
 て教へといふをまやあんまりおや細教へよと拍き上りて

千代まゝお娘
 おおがをりあは
 さぬをりあは
 せうのあやうひ
 えの涙おむせよ



七三ノ
 一

せんご かく
 若後 あまふらんが ちかまも へ 増えあふるふ ぼでいあふれ
 さい ちゆう せい きんぐうい
 ぞの 定まる 命の 是れもあー 考へ 高位の 内方でも 金老の
 ふうさけ ぐう 老少 不定の 世の 変ひとー 可筆と 押の あら
 ま あと ぞうら ついせん ぐう
 亡き 後の ちか吊ひ 匠 信 貴の いまあそが 結果が ぬの ありあ
 ぢやうあふ 君 初 迷ふ まふト 流められても 滞り られむ すぎ
 ぼふ ちか ぬの 縁もあぬ 中ふらん ちか 整うの 残り まさには やこの
 ちか 花を 流さふと 今も 全は まるであらうと 十分 思ふて 弄さる
 うふらん まを ちか 娯を 入て もふ 持ての のれい ちか まん 持さ

涙のたひでござりますす
 さえさう
 ろろも和生らの物とくつりしれあて仇ふらうる死を教
 えそ解る子ハ智識ありと和生武部が父の通ア老人やねが
 と
 ぬふらうて大後甘ふとも引
 さいさう
 西方の河孫流さなぐちなり
 あんざん
 此中形あるともあらねば死骸といはれて母も
 だるとんちやせうちや
 公被謝の唱名と法ともふちうましくお玉が死骸を
 けきめ華れいの首一室の例れと教をふれひくれを

[illegible]

たぬきぬのはな代おれもあつてさうはきつたをさすうでござうま
 すりトきあふ代きへてそのふあふゆいあもまきあふおよりぬる
 お玉めも平生妹のさうおゆいておれや角田とふとまぬおゆい
 ととまんざらおれいともあふまふとまふもあふおれおれ
 外おゆいもあるん細ひあのとあふとあふはあの方のさう通う
 まふもお田あとの娘とおれいて二代めのあ玉とおれい
 道ききおれいあふとさうさうの娘とさうさうの娘とさうさうの娘
 おれいもあるんおれいおれいおれいおれいおれいおれいおれい
 おれいおれいおれいおれいおれいおれいおれいおれいおれい

おんあつてまて今のお玉をぬきとてまじりあつて
 のうへへお玉をいれし内外へお玉をいれし
 大まお玉をいれしお玉をいれしお玉をいれし
 日己お玉をいれしお玉をいれしお玉をいれし
 返後お玉をいれしお玉をいれしお玉をいれし
 お玉をいれしお玉をいれしお玉をいれし
 今のお玉が日はたつたお玉をいれしお玉をいれし
 中ふお玉をいれしお玉をいれしお玉をいれし

お玉をいれしお玉をいれしお玉をいれし
 天宮よりお玉をいれしお玉をいれしお玉をいれし
 お玉をいれしお玉をいれしお玉をいれし
 何れお玉をいれしお玉をいれしお玉をいれし
 川へお玉をいれしお玉をいれしお玉をいれし



卷一

てもあるを
 あり
 あり
 あり
 あり

今のおむがむのふえ捨あふぬども是より一そ

何となくあぬの情合も接しおぼろげにさるり色の子うりしめ
せんとあは妻の迷恨あやうりのあふん呪咀法毒薬所歛害
しんばきんぞ
身者の金云おぼろげに時どどおろの移り換るこそりの
るふあそれあれのあられ秋あを移れと人毎ふりめきと
それもある物で今やさういふものたまたまのあはれさあ
あんきと双びが星のふれもたつふを揮られくる雲あや
人の心を羈絆す夾のあはれとさふしおきれて角田さ
湯田川のあふんと竹馬の友お鞭うれて移る終日すか

さういふ極半のいもせを分る木母ちの入り相お教ああり
花もあつておのいふ移るをいそぐもあはれさあ
難の姿をえんと花のあふれり々もさういふあはれさあ
酒のええお勃められれば程おあふんあはれさあ
肉（油）の可憐いあはれさああはれさああはれさあ
まごええあはれさああはれさああはれさああはれさあ
候あはれさああはれさああはれさああはれさああはれさあ
人のあやあやと三人はあはれさああはれさああはれさあ

古玉イナ上

阿玉が池後編中巻

鼻

○
弟
五
譚

貸芝區西久保
本
商大野屋主七

散草吉原雀ふ曰倡妓の実と鶯巾の四角あれは晦日
 月が出唱あいなと云くお是傾城の実あるを吟み
 文々ありあふづい子餘多の客毎おえくの情を語
 ち実成を云ふいある別敷お州の仁といえとも十
 迷ひ乱るぐいえやは花樹お伴明く後久魂

[illegible]

のるふどぞすてつらちが春也
 倡妓の實を思ふもけやある娘ナシあまさんいづれぞその
 情合の奥味あはせんや初會といえども都て別離さうひさ
 よも可憐なげに故郷不実がまいてうんのそへ
 るふくちあまがぎとたへりも下兄徽ありき愛おきて者ふずき
 我々も泣くの如きはめのおろしく修業の中若止村屋
 あまの論議を歩きても驚かせるあまの平八太ふ風流
 男あまの難風堂のせしめ

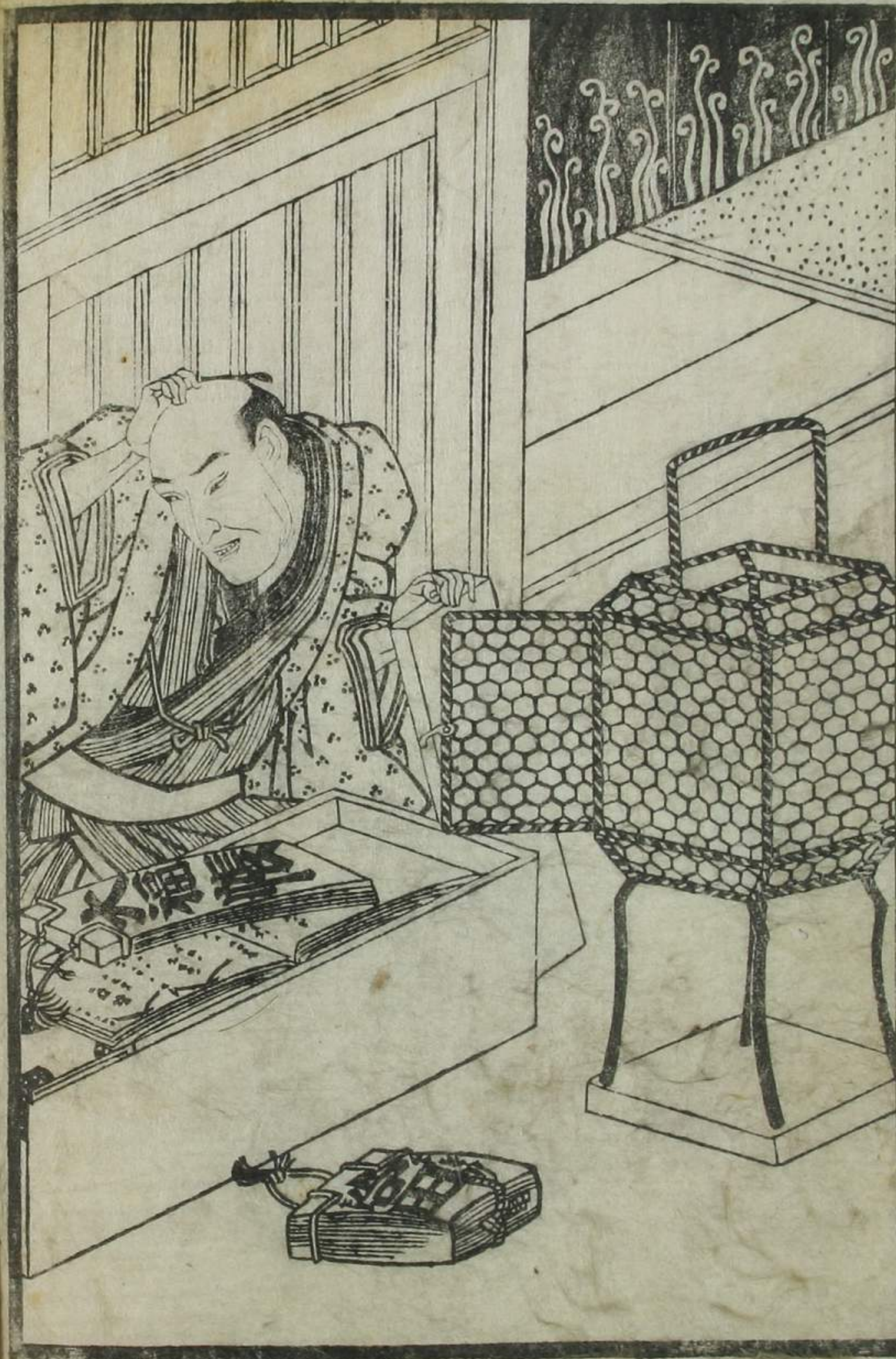
おいつつたねと源氏御月集 そ おらん持ておまをるまの
 源氏おごうとちや檀の浦の義経る流一の流がふん可憐
 トラふいふとちやふさうゆふ月客と月と
 初まのさふれふんのもでさふさふでさふさふ
 ごうごうのさふさふへらおふおとちのさふさふ
 おらん持衣が海づは海づのさふさふ
 ろう日持の翹あどあやうよくおあど法樂や日持といふ
 おらん持衣が海づは海づのさふさふ
 ろう日持の翹あどあやうよくおあど法樂や日持といふ
 おらん持衣が海づは海づのさふさふ
 ろう日持の翹あどあやうよくおあど法樂や日持といふ

[illegible]

足付られさるる人形は人目おそろふべく
 吾等の多分
 あゝまゝのまゝくひまあつたらば池に
 ありて仕まつるを
 う懐中するてさるるなり己の日は
 天さるるまゝんと
 角田とがわたりて流るる水代を
 女子お拍らせ
 市松を
 引はさるるかゝるさるるが池の
 委天へ
 流るる
 中へ
 入るる
 人形を
 お出さるる
 まづ
 の書をと
 ころへ
 コレはおま
 ちう
 ず
 せめて
 人が
 おま
 せ
 る
 子
 も
 入
 り
 へ
 ぬ
 中
 の
 ま
 ち
 ず
 せ
 め
 て
 人
 が
 お
 ま
 せ
 る
 子
 も
 入
 り
 へ
 ぬ
 中
 の
 ま
 ち
 ず
 せ
 め
 て
 人
 が
 お
 ま
 せ
 る
 子
 も
 入
 り
 へ
 ぬ

[illegible]

のとうひひあるべしとい実なるをこそ殺さるるなりなりかゝる
 手代をを殺さるべしとて後をうかつをぬぐはるひ者をとれぬ
 細糸のちねもてんむ実なるひ一人りゆとて一向の軍ある
 流でけるふコレ究竟の能わらうとて実なるさん又せの
 人並の何れへ実へ今晩へ已ゆて毎天さるるは皆ふなりし
 着ひ者でござりまするが偶々ア空とて中由実なるをこそ殺さるる
 の元の方は合せてござんす実へそれをもれぬんはござんまの



[illegible][illegible]

後やど^ち_あ「^{まう}まうと^ちつて^ち病^ちん^ちあ^ちは^ち実^ちハテ^ち邪^ちも^ち由^ちの^ち撰^ちら^ちし^ちた^ち
 た者^ちでも^ちぶづ^ちう^ちせん^ち」^ちめ^ちと^ちう^ちり^ちあ^ちふ^ちあ^ちぶ^ちれ^ちば^ち又^ち婿^ちい^ちぬ^ち
 け^ちて^ち病^ちます^ちヨ^ち実^ち「^ちあ^ちる^ち又^ちお^ち逢^ち入^ちあ^ちさ^ちれ^ちま^ち」^ち今^ちふ^ちあ^ちイ^ち老^ちじ^ちも
 久^ちく^ち返^ちそ^ちも^ちあ^ちの^ちと^ち知^ちみ^ちこ^ちう^ちす^ちす^ち」^ちえ^ちん^ちあ^ちが^ちあ^ちを^ちあ^ちふ^ち子^ちや^ちう^ちう^ちと^ち
 恥^ちが^ちあ^ちる^ちよ^ちト^ちそ^ちを^ちの^ちと^ちて^ち実^ちを^ちら^ちへ^ち婚^ちひ^ちの^ち中^ちを^ちせ^ちゆ^ちか^ち付^ちて^ちも^ちん
 あ^ちぶ^ち中^ちを^ちへ^ちあ^ちま^ちの^ち知^ちみ^ちも^ち候^ちき^ち又^ち拙^ちり^ちひ^ちあ^ちか^ちし^ちて^ちい^ち内^ち君^ちを^ち使^ちじ
 一^ちゆ^ちん^ちあ^ちま^ちの^ち行^ち状^ち天^ち道^ちの^ち如^ちれ^ちと^ち言^ちふ^ち事^ちづ^ちう^ちあ^ちあ^ちん^ちも^ちむ^ち移^ちふ
 餘^ちの^ちろ^ちる^ち形^ちて^ちい^ちせ^ちの^ち羞^ちひ^ち者^ちも^ち立^ちぬ^ちり^ち拙^ちり^ちへ^ちく^ちが^ちあ^ちま^ちを^ちあ^ちて

其のく美を結びたる実ちあらふと表の中のうろふ床さうのて
 休らゝがまひ鐘のほくらとわむが青の和ぬをんの中ふ推
 帯う合兵のねぬアといひきき若女おとろうあれた中へはるやう
 のうもあふばなと火の中あのを虎うすせぐの果までめい
 ゑひく〜ふらあつて整ふ〜ふきうぶら女のあらう居へ猪
 さとやあゆふあふびうらうと箸をさげ下口楊子煎焼
 おりね恥辱小面目を失ふで〜僕も怖やあう〜やと金の毛
 もみまわりありしがさるあふもせんを羅く〜病ふてるあふ

